

りんご栽培技術情報

～摘果、夏期管理、梅雨期の防除～

ポイント

- 果実肥大や花芽の確保のため、計画的に摘果作業を進めましょう
- 夏期管理を行い、枝の下垂や樹の倒伏を防ぎましょう
- 病害虫の発生を抑えるため、園地の観察と適期防除を徹底しましょう

1 気象経過と3か月予報

4月から7月中旬までの気温は、概ね平年よりも高く推移しました。降水量は、時折まとまった降雨が見られ、ならすと平年より多くなりました（図1）。

8月～10月の気温は平年並または平年より高め、降水量は平年より多い予報です（図2）。

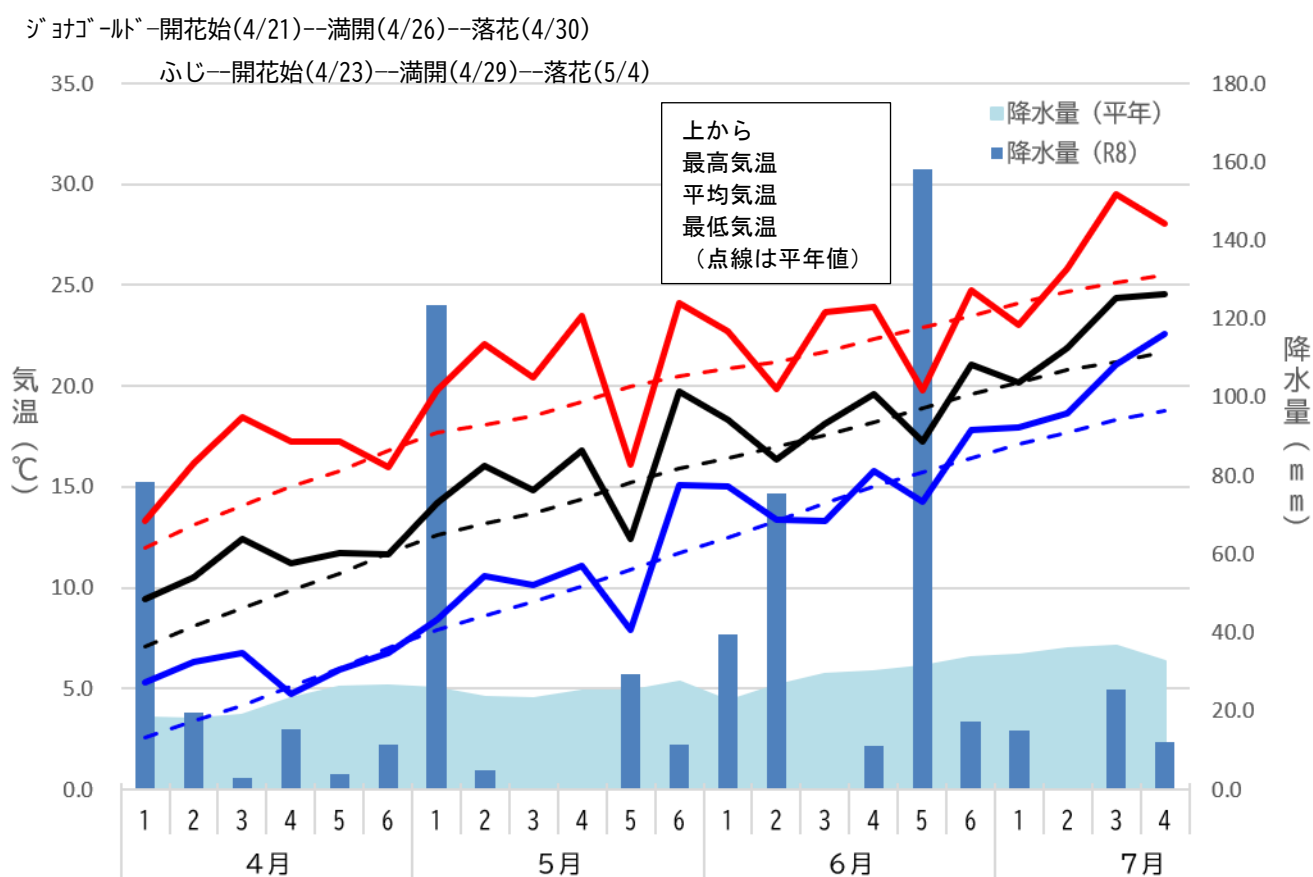


図1 令和8年度（2026年）気象経過図（4～7月中旬、大船渡アメダス観測点）

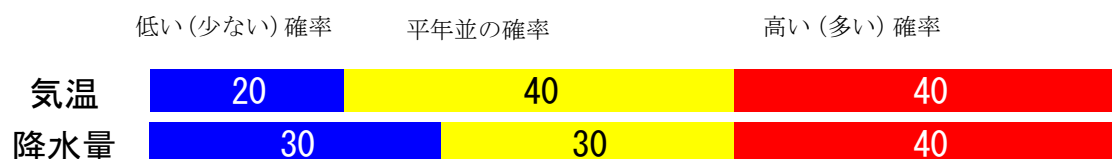


図2 東北地方3か月予報（8～10月、7月21日仙台管区气象台発表）

2 生育状況

(1) 果実肥大

3月以降の気温が高く推移し、開花期は平年より早まりました。令和8年7月11日時点の果実肥大は、「ジョナゴールド」が概ね平年並、「ふじ」は平年より前進しています。

表1 定点観測ほ場（陸前高田市米崎）におけるりんごの満開期と果実肥大状況

品種	満開期					果実肥大(mm)				
						R8 調査日：7月11日				
	R8年	平年	差	前年	差	R8年	平年※	前年※	平年比※	前年比※
ジョナゴールド	4/26	5/3	-7	4/28	-2	56.7	56.8	57.9	100%	98%
ふじ	4/29	5/7	-8	4/30	-1	58.4	50.6	53.6	115%	109%

※ 果実肥大の平年値、前年値、平年比及び前年比は7月11日調査時点のもの。

(2) フェロモントラップ

7月下旬にかけて、誘殺数が増加傾向を示しています。

7月下旬におけるモモシクイガの誘殺数は、令和7年並でした。

7月下旬におけるナシヒメシクイの誘殺数は、令和7年並でした。

7月下旬におけるキンモンホソガの誘殺数は、過去2年を大きく上回りました。

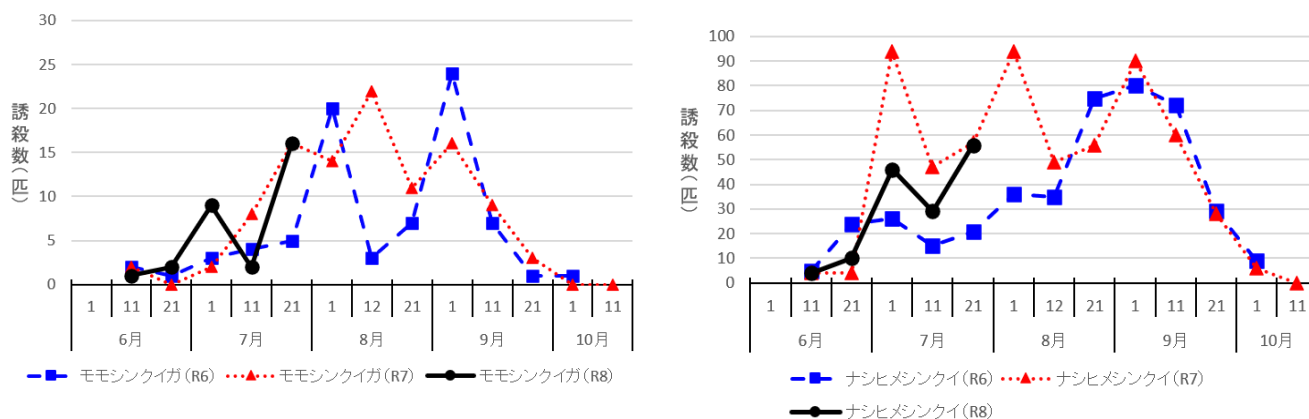


図3 フェロモントラップ誘殺数（7月下旬、左：モモシクイガ、右：ナシヒメシクイ）

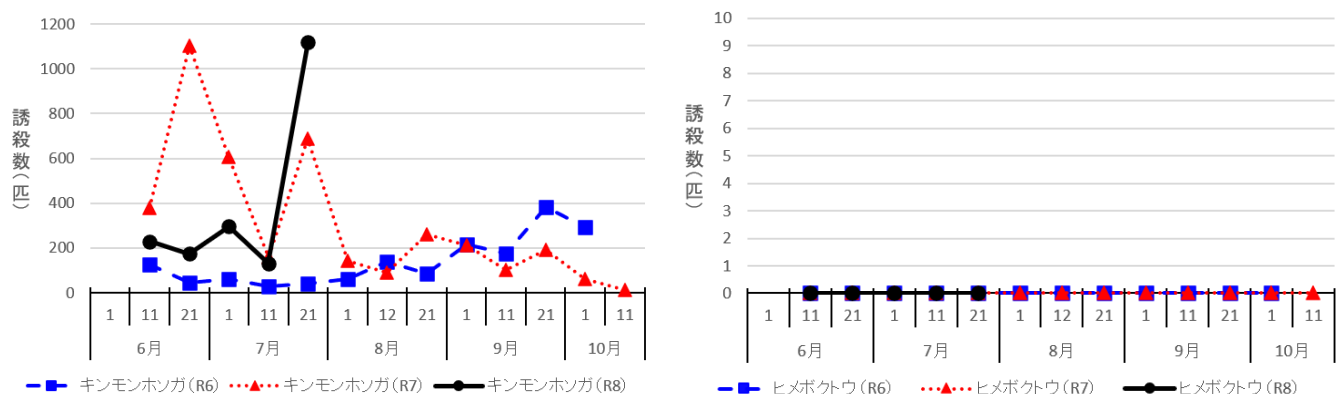


図4 フェロモントラップ誘殺数（7月下旬、左：キンモンホソガ、右：ヒメボクトウ）

3 摘果

果実肥大や翌年の花芽確保に向けて、計画的に摘果作業を進めましょう。

(1) 作業時期の目安

見直し摘果は、7月中旬までに終わらせることを目標に進めましょう(表3)。以降は、収穫まで園地を見回り、生育不良果や奇形果等を適宜摘果します。

表2 摘果スケジュール

作業時期	作業内容
満開 60 日後まで	仕上げ摘果終了
7 月前半	見直し摘果
お盆前	生育不良果(ピンコ)摘果
収穫まで	生育不良果や奇形果等の摘果

表3 令和8年の摘果終了目安

「ふじ」 満開	満開 60 日後 (仕上げ摘果終了)
4 月 29 日	6 月 28 日

※定点観察圃場(米崎)の目安

(2) 摘果の方法

《摘果のポイント》

- ・ 残った果実から選別し、表4を目安に着果させます。
- ・ 発育が良く、軸(つる)が太くて長く、形の良い果実をできるだけ残しましょう。
- ・ 果台枝(副梢)があり、果実の周辺に葉が多い場所に着果させましょう。
- ・ 枝の左右にバランスよく、ハサミ1つ分以上離して着果させてください。
- ・ 樹勢の弱い樹は1~2割少なく、樹勢の強い樹は1割程度多く着果させます。

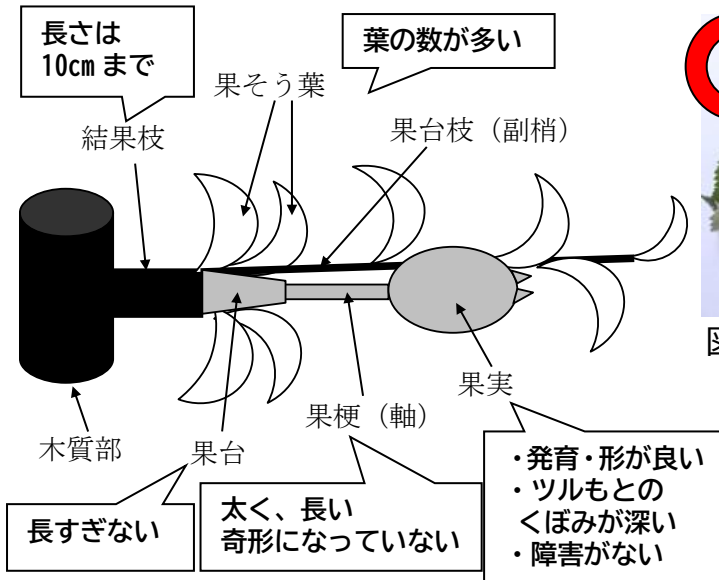


図5 素質の良い幼果(果そう)の特徴



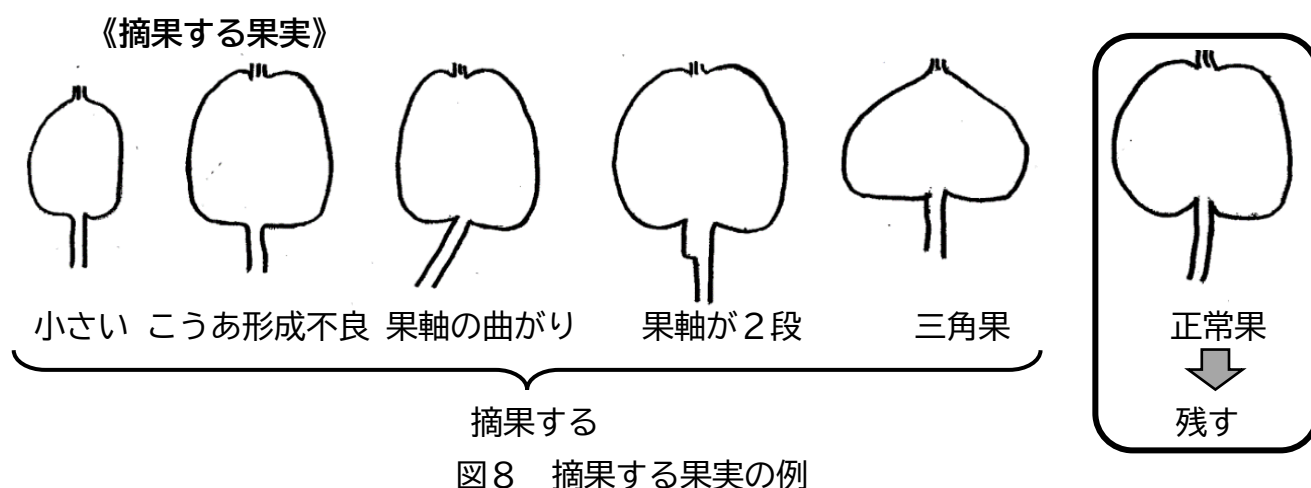
図6 果台枝のある果そう



図7 果台枝のない果そう

表4 主要品種の摘果強度と1果あたりの葉数の目安（1果あたり葉数は1果そうを約12葉とした場合）

品種	摘果強度	1果あたり必要葉枚数
「紅玉」	4～5頂芽に1果	50～60枚
「ふじ」・「つがる」・「王林」・「きおう」・「さんさ」 「紅口マン」・「シナノゴールド」・「紅いわて」	5～6頂芽に1果	60～70枚
「ジョナゴールド」・「北斗」（3倍体品種）	6～7頂芽に1果	70～85枚



- ・ 生育に異常が見られる果実は摘果します（図8）。
- ・ 果実同士がぶつかる位置にある果実は、果実表面に傷をつけるおそれがあるので、素質の良い一方を残して摘果します。
- ・ 摘果の際は、軸（果梗）を短く切りましょう（特に「ふじ」や「シナノゴールド」）。

4 夏期管理

樹の生育状況を確認しながら作業を行い、枝の下垂や樹の倒伏を防ぎましょう。

（1）夏季せん定

時期が早すぎると、一度停止した新梢が二次伸長するおそれがあるので、8月下旬から9月上旬にかけて、樹勢の強い樹を対象に行います。

側枝の上面から出ている直上枝のうち長さが30cmを越えるものを間引くほか、30cm以下の新梢でも枝が混んでいる場合は日光や薬剤が通りやすいよう、適宜間引きます。

また、直上枝が多くせん定により葉数が不足する場合は、枝の基部から十数枚の葉を残し、冬季せん定の際に根元から整理します。

なお、過剰な夏季せん定は樹勢を弱め、紋羽病の発病要因となることが多いので、紋羽病を発病するおそれがある園地では、夏季せん定を最小限にとどめます。

（2）ひこばえの除去

主幹の地際部からひこばえの発生が見られます。これを放置すると、風通しが悪くなり薬通りも悪くなるため、病虫害の溜まり場になるおそれがあります。樹の様子を観察しながら、適宜除去しましょう。

(3) 支柱立て・枝吊り

果実肥大が進むにつれて、枝が下がり下の枝と重なることが増えます。枝が重なると、葉の光合成や果実の着色に悪影響を及ぼすので、支柱を入れて日光があたるようにしましょう。また、最下部の側枝では果実が地面に触れてしまうのを防ぐため、枝吊りをしましょう。

(4) 主幹の結束

わい性樹は根が浅く、強風で倒伏することもあるので、台風が来る前に主幹を支柱に2・3か所結束します。

なお、結束した資材はほどけたり切れそうになっていないか随時確認するとともに、以前結束した資材が枝に食い込んでいないか確認して結び直しを行います。特に、若木は主幹が大きくなる際、資材が食い込んでくびれることがあるため、注意して観察します。

5 病害虫防除

梅雨期は、雨の日が多くなり、各種病害が感染及び伝染しやすくなります。この時期の防除は、散布間隔が空きすぎないように注意し、雨前散布を心がけましょう。

また、気温の上昇とともに、害虫も増えやすくなってきます。園地における発生状況を確認し、発生に応じて対処してください。

表5 6月下旬から8月上旬の病害虫防除暦（「令和8年りんご病害虫防除暦」より抜粋）

回数	防除時期	散布日 記入欄 【月/日】	病害虫名	散布薬剤名 ※○内の数字は使用回数の上限	希釈 倍数	使用 時期 (収穫前日数)	10a当り 散布量 (リットル)	防 除 の 要 点 (◇:褐斑病、★:ハダニ類、△:なし近接園、▽:もも近接園)
7	6月下旬	【 / 】	斑点落葉病、褐斑病、輪紋病、炭そ病 斑点落葉病、褐斑病 キンモンホソガ、シンクイムシ類	菌 ジマンダイセン水和剤 (またはベンコゼブ水和剤) 菌 ユニックス顆粒水和剤47 虫 モスピラン顆粒水溶剤	③ 500 ④ 2,000 ① 4,000	収穫30日前まで 収穫14日前まで 収穫前日まで	550 (700)	●モモンクイガの産卵が始まる。 ●キンモンホソガ第1世代羽化盛期。 ●コンフューザーRを使用する園地では、モスピラン顆粒水溶剤の散布を省略できる。 ●カルハード(カルシウム資材)を1,000倍で6～7月中旬に3～5回散布し、ビタービットや油上りの軽減を図る。 △なしと同時防除する場合は、ジマンダイセン水和剤またはベンコゼブ水和剤の希釈倍率を800倍に変更する。 ▽ももと同時防除する場合は、ジマンダイセン水和剤またはベンコゼブ水和剤の希釈倍率を800倍に変更する。 ▽ももと同時防除する場合は、ユニックス顆粒水和剤47の混用を避ける。
8	7月上旬	【 / 】	斑点落葉病、褐斑病、輪紋病、炭そ病 ハマキムシ類、モモンクイガ、ナシシメシンクイ ハダニ類	菌 ナリアWDG 虫 ダイアジノン水和剤34 ダニ ダニオーテフロアブル	③ 2,000 ④ 1,000 ① 2,000	収穫前日まで 収穫30日前まで 収穫前日まで	550 (700)	☆殺ダニ剤の散布時期は、ハダニ類の発生状況に応じて調整する。 ☆ダニオーテフロアブルの散布を繰り返す場合は混用できる。繰り返す場合は単剤で特別散布する。 ☆ダニオーテフロアブルは銅剤との混用により分解が早まり効果の低下が懸念されるため、混用しない。また、近接散布による効果の低下を避けるため、ダニオーテフロアブル散布から10日間は銅剤を散布せず、銅剤散布後は1ヶ月間ダニオーテフロアブルを散布しない。 ●輪紋病の果実感染が多くなる。 ●キンモンハモグリガ第2世代羽化盛期。 ●コンフューザーRを使用する園地では、ダイアジノン水和剤34の散布を省略できる。 ●カルハード(カルシウム資材)を1,000倍で6～7月中旬に3～5回散布し、ビタービットや油上りの軽減を図る。
9	7月中旬	【 / 】	斑点落葉病、褐斑病、輪紋病、炭そ病 シンクイムシ類	菌 ダイパワー水和剤 虫 モスピラン顆粒水溶剤	③ 1,000 ① 4,000	収穫前日まで 収穫前日まで	550 (700)	◇褐斑病の前年多量発生では、トップジンM水和剤(1,500倍、収穫前日まで、6回以内)を加用する。 ☆ハダニ類の発生が多い場合は、粘着くん水和剤(500倍、収穫前日まで)または、アカリタッチ乳剤(3,000倍、収穫前日まで)を単剤で散布する。 ●斑点落葉病急増期。 ●7月中～下旬はモモンクイガ産卵最盛期。 ●不要な徒長枝は切り取る。 ●コンフューザーRを使用する園地では、モスピラン顆粒水溶剤の散布を省略できる。 ●カルハード(カルシウム資材)を1,000倍で6～7月中旬に3～5回散布し、ビタービットや油上りの軽減を図る。 ▽ももと同時防除する場合は、ダイパワー水和剤をトップジンM水和剤(1,500倍、収穫前日まで、6回以内)に変更する。
10	7月下旬	【 / 】	斑点落葉病、褐斑病、輪紋病、炭そ病 シンクイムシ類、カメムシ類、(ケムシ類)	菌 アリエッティC水和剤 虫 アルバリン顆粒水溶剤 (またはスタークル顆粒水溶剤)	③ 800 ③ 2,000	収穫前日まで 収穫前日まで	550 (700)	☆殺ダニ剤の散布時期は、ハダニ類の発生状況に応じて調整する。 ●キンモンホソガ第2世代羽化盛期。 △なしと同時防除する場合は、アリエッティC水和剤を散布後14日間は収穫しない。 ▽ももと同時防除する場合は、アリエッティC水和剤をベルコート水和剤(1,000倍、収穫前日まで、3回以内)に変更する。
11	8月上旬	【 / 】	斑点落葉病、褐斑病、すす斑病、すす点病 シンクイムシ類 ハダニ類	菌 ストロビードライフロアブル 虫 サムコフロアブル10 ダニ コロマイト乳剤	③ 3,000 ③ 5,000 ① 1,000	収穫前日まで 収穫前日まで 収穫前日まで	550 (700)	◇8月下旬まで褐斑病の発生の有無を観察し、発生が確認された場合は、速やかにトップジンM水和剤(1,500倍、収穫前日まで、6回以内)を特別散布する。 ●収穫にあたっては、使用した農業の収穫前日数を必ず確認する。 ▽ももと同時防除する場合は、ストロビードライフロアブルの希釈倍率を2,000倍に変更する。 ▽ももと同時防除する場合は、コロマイト乳剤を粘着くん水和剤(500倍、収穫前日まで)または、アカリタッチ乳剤(3,000倍、収穫前日まで)に変更する。

(1) 防除のポイント

ア 散布は雨前に、散布間隔が空きすぎないように注意！

病害は降雨によって感染し、被害が拡大していくことが多いです。そのため、降雨の前に、予防的に散布を行うことが重要です。

また、梅雨期は降雨が多く、散布間隔が空きやすい時期です。散布予定日が雨の場合は散布日を早めたり、午後から雨でも午前中に散布したりするなど、散布間隔が空きすぎないように注意してください。

イ 農薬の収穫前日数に注意！

6月～7月の防除で使用する薬剤は、収穫前日数の長いものがあります。極早生品種（「紅ロマン」等）を栽培している園地では、いつから収穫が可能になるか必ず確認し、薬剤散布を遅らせないようにしましょう。

- ◎ 7回目（6月下旬） 殺菌剤 ジマンダイセン水和剤（またはペンコゼブ水和剤（収穫 30 日前まで））
農協の防除日：6/24・27 ⇒ 31 日後 ⇒ **収穫可能日 7/25 または 28 以降**
- ◎ 8回目（7月上旬） 殺虫剤 ダイアジノン水和剤 3 4（収穫 30 日前まで）
農協の防除日：7/2～3 ⇒ 31 日後 ⇒ **収穫可能日 8/2～3 以降**

ウ 散布むらが出ないように注意！

徒長枝が繁茂すると、薬剤がかかりにくくなり、病虫害の発生を防げない可能性があります。特に、褐斑病等は散布むらの影響が出やすいです。薬剤散布時は、十分な量を散布するようにしましょう。

（2）各種病虫害の対策

ア 腐らん病

枝幹部に発生し、春先から初夏にかけて樹皮が不正形に赤褐色になり、腐敗します。病斑が見られる枝のせん除や病斑部の削り取りを早期に行うことが重要です。病斑部を削り取る場合は、病斑部より少し大きい範囲を削り取り、その上からトップジンMペースト（原液、3回以内）を塗布します。

イ 斑点落葉病

高温多湿を好み、梅雨期（6月下旬～7月下旬）に急激に感染が進みます。薬剤のかかりにくい樹上部の徒長枝から感染が拡大することが多いので、不要な徒長枝は早めに整理しましょう。

ウ 輪紋病

6月下旬～8月下旬が主要な感染時期で、この時期に高温多雨条件が続くと感染しやすくなります。幼果で感染し、果実の成熟とともに発病します。

枝幹に発生するといぼ皮症状（図9）になり、ここから孢子が飛散し、果実に感染します。枝の感染も6～7月に多いので、薬剤を主幹までしっかりと到達させ、枝幹のいぼ皮を作らないようにしましょう。



図9 主幹部のいぼ皮症状

エ 褐斑病

通常は8月以降に発生が確認されますが、高温の影響で感染時期が早まり、6月下旬頃から発生が見られる場合もあります。園地の周縁部や枝の混みあっている箇所等、薬剤のかかりにくい場所から発生が見られるため、園地を注意して観察しましょう。

梅雨期（6月下旬～7月下旬）は褐斑病の二次感染時期です。薬剤の散布むらがないようにしましょう。

発生が確認された場合は、速やかにトップジンM水和剤（1,500 倍、収穫前日まで）を特別散布します。

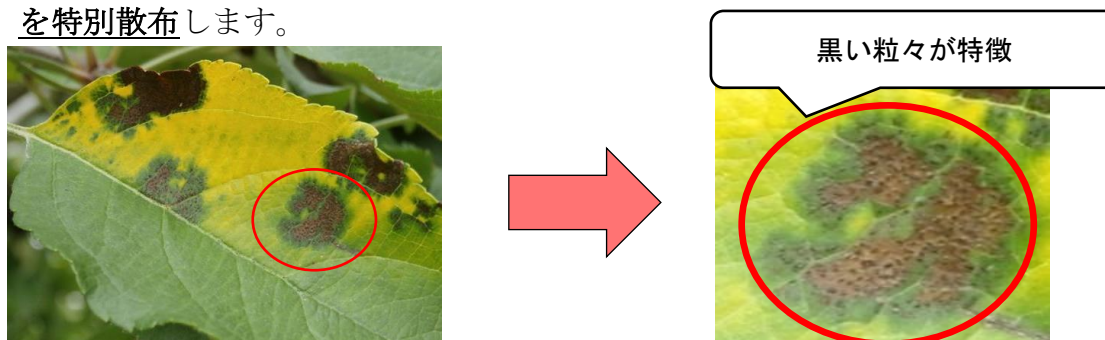


図 10 褐斑病の病斑

オ カメムシ類

成虫が飛来し、果実に口吻を刺して吸汁します。
園地内の飛来状況を確認し、大量の飛来が見られた場合は効果の高い薬剤で速やかに防除します。

管内では、被害果が多いという声も聞こえています。
園地を定期的に見回り、飛来状況を確認しましょう！

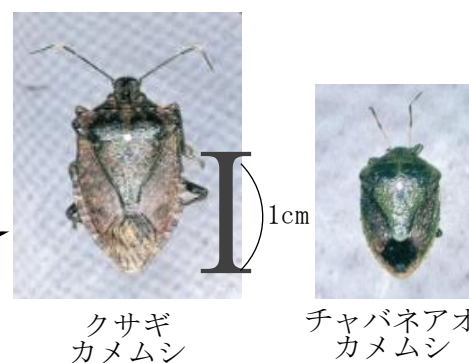


図 11 果樹カメムシ類

カ ハダニ類

主幹近くの果そうや新梢の基部を確認し、発生を確認した場合は薬剤を十分量散布しましょう（図 12）。

枝の混みあった場所は散布前にせん除し、薬剤の通りが良い樹形を維持しましょう。

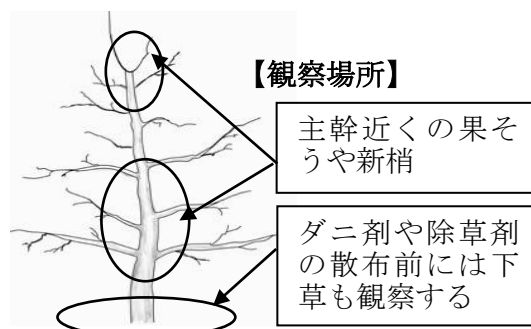


図 12 ハダニ類の観察場所

【薬剤散布の注意点】

- ① 基幹剤（ダニオーテフロアブル）散布後にハダニ類が多発した場合
⇒ 粘着くん水和剤（500 倍）またはアカリタッチ乳剤（3,000 倍）を散布し、補完剤の散布まで密度を低く抑えます。
- ② 補完剤（コロマイト乳剤）散布時にハダニ類の発生が少ない場合
⇒ 補完剤を後ろにずらしても構いませんが、発生を確認し散布が遅れないようにします。

【参考】ビーエー液剤（ベンジルアミノプリン液剤）を利用したフェザー苗の育成

【6月以降の管理】

6月上旬頃

⇒ 芽が 20cm 位に伸びたら 1 回目の
ビーエー液剤を処理します。

8月頃まで

⇒ 概ね 10～15 日間隔で新たに伸長した部分
にビーエー液剤を処理します。

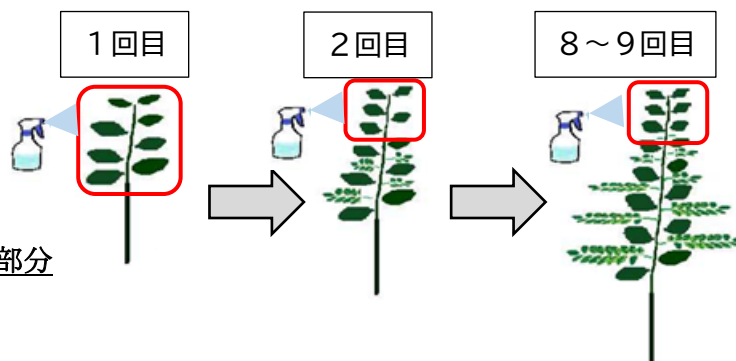


表6 ビーエー液剤の登録内容（抜粋）

作物名	使用目的	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法
りんご (苗木)	側芽発生 促進	50～100 倍 ※	5～10ml /苗木	新梢 伸長時	10 回以内	新たに伸長した 新梢部に散布

※ 希釈倍数 「ふじ」、「もりのかがやき」、「はるか」は 100 倍

「紅ロマン」、「きおう」、「紅いわて」、「シナノゴールド」、「大夢」は 50 倍

【連絡先】大船渡農業改良普及センター（27-9918）

【資料利用上の注意】

この資料は、令和 8 年 7 月 10 日時点の農薬登録情報に基づいて作成しています。

農薬は、使用前にラベルの表示事項を必ず確認のうえ、使用基準を遵守し、農薬使用者が責任をもって使用してください。また、農薬の飛散防止対策に努めてください。